神奈川工科大学
KANAGAWA INSTITUTE OF TECHNOLOGY

CENTER for REGIONAL COOPERATION and CONTRIBUTION

ニュースレター
NEWS LETTER

地域連携・貢献センター

2021年6月
Vol.4

ご挨拶

ニュースレターNo.4は2021年度最初の発行でもあり、小宮学長にご登場願いました。
そして、地域連携・貢献センターは2年目に入ります。当センターは、地域連携災害ケア研究センターの管理室も担っており、防災・災害対策にも力を入れていく予定でおります。皆様のお力添えをよろしくお願い致します。

地域連携・貢献センター長　小川 喜道

Page

● ご挨拶 ・・・・・・・・・ 1
● 小宮学長の流儀 ・・・・・・ 1~3
● お知らせ ・・・・・・・・・ 4
● Topic ・・・・・・・・・ 4
● 地域連携・貢献センター2021年度計画 ・・・・・・・・・ 4

小宮学長の流儀

研究室の窓を開けたら、地域と工学技術を結ぶヒントが流れていた

神奈川工科大学に奉職されてから、ずっと建学の精神「地域貢献」を追求されてきた小宮学長に、地域貢献実践のきっかけや想いについて、小宮学長とともに当学の地域貢献を推進してきた地域連携・貢献センターの小川センター長がお話しを伺いました。

神奈川工科大学 学長
小宮 一三

小宮学長のプロフィール
電電公社(現　NTT)通信研究所にて、ファクシミリ、画像処理の研究実用化に携わり、1993年10月神奈川工科大学電気工学科(現　電子情報工学科)教授。2005年4月同大学副学長・情報学部長・情報ネットワーク工学科(現　情報ネットワーク・コミュニケーション学科)教授。2009年4月から現職。工学博士。

小川：　今日は、神奈川工科大学が今までに、地域貢献としてやってきたことを振り返りならら、今後の地域貢献の展開や学長の想いを伺わせていただきたいと思い、当時の写真や報告書等をお持ちしました。
こうしてみると、大学は地域貢献に力を入れてきたことがよくわかります。現代GP(解説①)、東日本大震災の時の学生と教職員のいろいろな支援活動(解説②)、子どもたちには、理科教室や未来塾(解説③)、高齢や障がいにも焦点を充てたブランディング事業(解説④)などでしょうか・・・。

小宮：　こうしてみると本当に懐かしい写真や資料がたくさんありますね。

小川：　最初に取り上げたいのは、学長が情報学部の教授でいらしたときの現代GPです。

解説①　平成17年度に当学が文部科学省から選定された「現代的教育ニーズ取組支援プロジェクト(現代GP)」。テーマは「地域と連携したIT実践教育の展開—高齢者・障害者の利用する地域情報mapの開発と運用—」

解説②　現地でのボランティア活動や車椅子修理屋(学内ボランティアサークル)、カンパ等々。詳細は神奈川工科大学/災害支援関連ブログ
https://blog.goo.ne.jp/kait

解説③　レゴ®教材を活用した理科学習に加え、小学校理科に登場する実験やプログラミング教育などで構成された神奈川工科大学独自の教育プログラム。

解説④　平成30年度に当学が選定された「私立大学研究ブランディング事業」。
テーマは「全国のモデルとなる先進高齢者支援システムの開発と地域社会への展開」

2021年度 事業計画

地域連携・貢献センター

地域連携・貢献センター中長期計画及び2020年度実績を勘案し、2021年度計画を策定しました。特に、今年度は近年、繰り返されている自然災害や新型感染症対策等に着目し、当学の有する知識や技術を活用した厚木市、厚木市大学連携・協働協議会との連携強化による災害対策とフレイル予防事業に注力します。

(1) 地域連携・貢献センターの基軸事業の整備
　ア) 地域課題への参画
　　・防災対策(自治会、厚木市大学連携・協働協議会)
　　・地域振興(山北町)
　　・フレイル予防(厚木市)
　イ) 中長期計画の進行管理
(2) 私立大学等改革支援事業タイプ3(地域社会への貢献)への関与
　ア) 包括連携協定の推進
　イ) リカレント教育の推進
(3) 地域連携災害ケア研究の推進
　ア) 地域連携災害ケア研究センター管理室としての活動
　イ) 防災教育講座(リカレント教育)
(4) 厚木市大学連携・協働協議会への参画

TOPIC 1

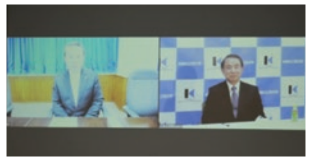
2021年2月
3年前から厚木市と当学が協働して、児童館を会場とした小学生が対象の「ものづくり教室」を実施しています。2020年度も、鳶尾児童館、山際児童館、緑ケ丘児童館で厚木市内の小学生を対象としたオンラインプログラミング教室を実施しました。これからは、小中学生への科学教室などへの協力の仕方も、オンラインを通じた新たなものとなっていきそうです。(なお、この協力授業は必修授業の「企業連携プロジェクトⅠ・Ⅱ」で、本学学生・創造工学部ホームエレクトロニクス開発学科渡部雄太さんが行ったものです。)

TOPIC 2

2021年3月13日、14日
神奈川工科大学の電子ロボ実行委員会が静岡県富士市八代町の教育プラザで子ども科学体験活動「プログラミングを体験しよう!」を行いました。同内容の講座を4回実施、小学4~6年生が約50人参加。講師は実行委員会の金井徳兼教授がリモートで務め、静岡県内在住の学生や卒業生がサポートしました。富士市とは連携協定を締結しています。

TOPIC 3

2021年3月23日
静岡県裾野市　×　神奈川工科大学
包括連協定を締結しました。



TOPIC 4

2021年4月1日
視覚障害があっても子育てを一般の人たちと同じようにしたい、子供の成長を記録していきたいと考えている視覚障害者の声に応えるために制作された「わが子の成長記録ハンドブック」(NPO法人神奈川県障害者福祉協会制作)の作成支援を創造工学部ロボット・メカトロニクス科の高尾研究室の学生が行いました。
http://www.npo-kanagawa.org/wagakonoseityoukiroku.html

シンポジウム Symposium

Research Center for Regional Cooperation and Disaster Care

コロナ禍における災害対策
～要配慮者に対するケアを中心に～

本シンポジウムは、コロナ禍が続く中で、地震や風水害などに伴い避難を余儀なくされた際に、誰一人取り残されることなく全ての人の命と暮らしを守ることを念頭におき、企画しました。オンラインによるイベントとなりますが、自治体、医療的ケアを受けている当事者・ご家族、専門職等が一堂に会して、予想される課題、解決策などを議論します。ぜひ、ご参加ください。

日　　時：2021年8月4日(水)　13:30~16:30
参　　加：zoomウェビナー(定員500人、無料)
申し込み：https://kait-ccd.jp/のお知らせをご覧ください
主　　催：神奈川工科大学 地域連携災害ケア研究センター
　　　　　神奈川工科大学 地域連携・貢献センター
共　　催：厚木市大学連携・協働協議会
協　　力：厚木市

詳しい内容は下記センターのホームページ(https://kait.cco.jp/)

地域連携災害ケア研究センター

問い合わせ
神奈川工科大学 工学教育研究推進機構
地域連携災害ケア研究センター管理室
Tel:046-291-3153
E-mail:contact@kait-ccd.jp

TOPIC 5

2021年6月
地域連携・貢献センターが事務局を務める「地域連携・災害ケア研究センター」のホームページが開設されました。
https://kait-ccd.jp/
E-mail:contact@kait-ccd.jp

地域連携
災害ケア研究センター

神奈川工科大学
KANAGAWA INSTITUTE OF TECHNOLOGY
地域連携・貢献センター
〒243-0292 神奈川県厚木市下荻野1030
TEL.046-291-3153 FAX.046-291-3262
E-mail:chiiki-koken@ccml.kanagawa-it.ac.jp
URL:https://cp.kanagawa-it.ac.jp/ccc/
「kait」で検索するとHPにアクセスできます。 kait

編集：地元厚木市内のデザイン会社：(株)コンパス 厚木市小野603-1

編集後記

学長とセンター長の会談が大学と地域、「地域連携・地域貢献」について改めて考える機会をくれました。地域、連携、貢献、協働、つながる、地域包括ケア共助・・・大雨や台風などの自然災害に嫌なのに向かい合わなければならない季節を迎えるにあたり、キャンパスの濃い緑に囲まれて考えています。

幸世

小宮学長の 流儀

大学のあるべき姿を経験した現代GP
地域との連携の在り方モデル　学生にとっての学びの場

小宮：現代GPは平成17年でしたね。情報ネットワーク工学科教授の時に現代GPに採択されて、ITを使った街おこしをしたのですが、実際にはその3年くらい前から「ITを使った地域おこし」をスローガンに、厚木ITコンソシアムを立ち上げていました。現代GPは厚木ITコンソシアムで産官学民の連携で進めてきたデジタル福祉マップ開発事業をさらに発展的な展開をさせ、市民を巻き込んだ高齢者・障がい者の利用する地域情報マップの開発と運用を目的としたものでした。
この事業は車椅子利用者や高齢者が外出した時の危険情報やリスク、周辺情報をウェブにのせて、安全な最短コースを検索できるという当時としては新しい発想による展開でしたから、全国から非常に注目されました。NHKのニュース番組「おはよう日本」の生放送をはじめとして各種メディア、全国紙に取り上げられましたし、問い合わせも多数いただきました。
事業の内容は、実際に学生と障がい者と地域の人がグループを組んで一緒に地域を廻り、現場を確認してマップを作っていくというもので、市民のみなさんも学生と一緒に活動をすることを応援し、喜んでくれました。小川研究室で普段から学生の研究をサポートしてくれていた多数の障がい者が協力してくれて、学生にとっては貴重な学びの場となりました。学生と障がい者、市民で構成するグループが現地を確認し、体験しながら、システム開発企業担当者が問題が派生するとすぐにその場で学生と一緒に解決方法を模索するという産官学民が一体となった画期的なプログラムでした。厚木市も積極的に関わってくれて、あまり知られていないかもしれませんが、本厚木駅前の有隣堂の前の通り、「あつぎ大通り」は、現代GPの成果です。厚木市が国の補助金で、現代GPの結果に基づき、車椅子が安全に走行できる道路に改修してくれました。地域貢献に役立ったと思います。当時は携帯電話やインターネットが出始めたころで、IT革命というキーワードがさかんに使われていた時代だったので、厚木市のみんなの知恵を出しあって、ITに親しむ土壌を作りたいとの意向も後押ししてくれたようです。大学が単体として一生懸命になっても難しい取り組みを産官学民の力を結集して成果につなげることができ、大学としての地域貢献のあるべき姿を経験できたので、このような取り組みを是非とも復活させたいと思います。
　また、本厚木駅の周辺の路地の隅々まで学生と市民、障がい者が調査をする中で生まれた地元地域との交流が本当に良かった。地域へ出て、地域の人たちと一緒に地域の課題を見つけ、自らITの技術を使って解決していく・・・地域って生モノで、いろいろな課題を抱えているので学生にとってはよい学びの場です。ですから、本学に入学したからには、駅と大学の往復だけでなく「あつぎを知って欲しい」、あつぎを知ることがベースで、地域貢献は地域を知ることから始まると思います。気持ちがあってもどうしたらよいのかわからないといったこともあるので、大学が組織的に時代に合ったキーワードを打ち出し、参加しやすい仕組みを作ることが大きいと思っています。
　大学が地域連携を実践するのは、地域に貢献することがそもそも大学の役割であり使命であるから、ということのほかに、地域連携によって学生が成長することができるから、という大きな理由があります。

学生、市民、障がいのある協力者と共に街点検

学生が入力した情報により「バリアのないルート」を表示

小川：この事業は産官学民に協働の下地があったからこそ、可能な事業でしたよね。下地はどのように築かれたのですか。「いきさつ」ってあるのでしょうか。

研究室の窓を開けたら地域貢献の種が・・・

小宮：民間企業の研究職から大学の教員になったある時、窓を開けたら厚木市の防災無線で行方不明者捜索の放送が流れていました。その時にITで解決できないか、携帯電話とGPSを組み合わせて、所在確認ができないかと思いついて、福祉的な高齢者への貢献を考えるきっかけとなりました。それまでは、企業にいたので、ビジネス的な発想になっていましたが、大学に移ったのだから地域の人への貢献・福祉的な貢献ができるのではないかと感じたのです。そして、こういうことは一人でやるのではなく力を結集することが大切だと思い、そのためには、まずはITに親しむことだと考え「厚木ITコンソシアム」を作ったわけです。その当時の厚木市の市長さんもITによる街おこしを積極的に推進していたのでいい流れが作れました。自治体の影響力は大きいので、時代に合ったキーワードを大学として打ち出し、仕組みを組織的に大学側が作ることが大きいと思います。

東日本大震災と地域貢献
災害は我が事、大学の担うべき役割としての地域貢献

双葉町の避難所へ届ける物資を整理、箱詰め

車椅子修理屋サークルが東北の老人ホームで活動

小川：次に、話はちょっと飛んでしまうのですが、3・11東日本大震災の時の写真をご覧ください。福島県双葉町の住民が一斉に埼玉県加須市の高校に避難されてきて、そこで必要とされている物資を集め、市民の方にも協力いただいて、当学の学生とか厚木北高校の生徒たちが物資の整理をしている場面の写真です。実際に物資を届けに行ったり、車椅子修理屋サークルが女川に修理に行きました。教員も自分たちの技術を使った協力をしたり、2011年は入学式も始業式もできなかったけれど4月に授業が始まると、学食は災害応援ランチ（1食につき30円から50円を支援）を売り出したり、みんなができることを行ってやってきたとも思うんですけれど、この時の学長の想いをお聞かせください。

小宮：学長になって、すぐに3・11が発生し、いろいろなことをトップダウンで決定せざるを得ない状況・・・授業をいつから再開するのか、計画停電対応（研究継続に電気が必要な研究室）等々・・・となり、非常時の教育について学長判断を求められる場面が多数発生しました。幹部会議等を通し、みんなが協力的でイベントなどは中止しなければならなかったけれど、大きなトラブルはなかったように記憶しています。

小川：その時から、災害支援関係ブログを書き込んでいます。
昨年もコロナ禍の状況の中、教育委員会等からの依頼でzoomで小・中学生の科学への興味を支援する「ロボット製作のプログラミング講座」を公民館などで実施しています。学生が教員から指導を受けながら、子どもたちの科学への興味を育て、地域貢献を絶やさないように、複数の先生がたがコロナ禍の厳しい状況下の中、頑張ってくれています。それから、健康の問題についても、ブランディング事業に象徴される高齢者の介護予防的なプログラムの開発、実証に取り組むなど当学の地域貢献は多岐にわたっています。
現在の当大学の地域貢献について、学生も教員も場さえあれば活躍できる大学ですが、より一層、負担にならないような形で拡げていきたい思っているのですが、学長としてのその辺の姿勢についてのお考えをお聞かせください。

目標は地域に密着した大学　地域に頼ってもらえる大学

小宮：もともとの建学の精神の1つが地域連携なので、地域に密着した大学として、どのようにしたら地域に頼ってもらえる大学になれるかに尽きるのですが、大学は徹底的に活動に対して支援する立場です。いろいろなアイディアをどんどん出して活動して欲しい。今までの話の中で触れたように、私自身がフットワークや人脈を開拓して、積極的に交渉したり、働きかけたりしてきたので、トップダウンでの実施は考えていません。やる気、モチベーションがなければ続かないので、やる気のある教職員を中心に応援したい。
高齢者の諸課題解決のためのブランディング事業や災害対策などは、地域貢献の集大成と思っています。全国のモデルになることを目指しています。大学がモデルになるのではなく、この地域がモデルとなるのが究極的な目的です。

小川：大学があることで地域が生活しやすく、豊かになっていくことを示すということですね。そのためには、科学技術、研究者や学生のパワーやモチベーションが必要です。そこには地域連携・貢献の理念の存在が不可欠です。

小宮：本学の理念の象徴でもある地域連携・貢献センターはスモールでスタートしましが、やる気のある、いろいろな力を結集させて、大きくすることと・大学の支援の下で理念に沿うような活動を期待しています。これからの社会はITやロボット技術が進歩していきますけれど人間中心の社会となるでしょう。工科系大学として、実のある貢献活動を企画・調整して、他とは違う神奈川工科大学ならではの地域貢献の実践を示して欲しいと期待しています。

対談を終えてホッと一息！